

平成三十一年度 入学試験 (社会人) 問題 (国語)

一次の文章を読んで、後の問【1】～【12】に答えなさい。なお、作問の都合上、形式段落の先頭に  
通し番号を付しています。(1)～(13)

① リズムは世界中の随時、随所に現れる現象であるが、その現れの場所として、特記すべき独特の存在が人間の身体である。身体はそれ自体、生のリズムの単位にほかならないが、個人の身体はほかに例を見ない求心力に恵まれ、その単位形成の力は抜群の強さを示すからである。それは誕生と死という二つの明確な断絶に前後を挟まれ、種族生命の長い流動のなかでマギレ<sup>㉔</sup>難い単位をかたちづくる。さらに個人の生涯はその内部にもめだった時間の単位を生みだし、成長、成熟、老衰という段階を踏んだリズムを繰り広げる。

② 身体は一面で生理学的な肉体と重なりあっていて、他の動物のⅠと同じく本能的というべき運動をも見せるが、面白いことに、生まれたての乳児の段階からその運動はすでにリズムに乗せられている。乳児の最初の能動的な行動は母乳の吸引だろうが、吸引は口腔内に陰圧をつくり、母乳の充満を待って、それを嚥下するという三拍子のリズムを踏む。同時に乳児は両手を交互に動かして母親の乳房を圧迫するが、これはもつとも素朴な二拍子の運動だろう。二拍子と三拍子は基礎的で普遍性の高いリズムだから、成長する幼児の生活習慣の形成に大いに寄与するはずである。

③ ギョウガ<sup>㉕</sup>して手足をばたつかせるさいには二拍子をとることが多いし、初めて立つとき、台につかまって、両膝を揃え、それを強く伸ばすという三拍子を刻むのが普通である。もちろん、二足歩行のような高度の習慣形成にはおとなの指導が不可欠だが、その指導が可能になるのも幼児のⅡが運動のリズムを知っているからだといえる。本能から習慣へ、生理的の肉体から文明的の身体へという重大な移行が起こるとき、両者の仲立ちとなり、移行の軌道となるのはリズムなのである。

④ さらに巨視的に見たとき、人の肉体は誕生から死まで絶え間ない変化に曝されるが、文明的身体の変化ははっきりとした識<sup>㉖</sup>識に区切られたリズムを刻む。文明圏によって具体的な年齢は違うが、成長、成熟、老化の節目を祝つたり慰める行事は世界中に見られる。また肉体的な変化はほとんど感じられないにもかかわらず、毎年の誕生日を記念する風習も普遍的に定着している。身体というリズム単位の完結性がとくに高いのは、それがこうしてたえず現在を生涯のなかに位置づけ、あたかも藝術制作にも似て、部分を全体へと有機的に結合しているからでもあるだろう。

⑤ ちなみに注意すべきは、この文明的な身体と生理的な肉体、いわゆる自然物としての肉体との特異な関係である。一面では肉体は身体の媒体にほかならず、身体の運動を伝動し、またそれに抵抗するという点では、海の波にたいする海水と同じ役割を負っている。肉体と身体が同一物ではないのは明らかであって、第一に肉体が誕生と死によって外から統一されているのにたいして、身体は習慣の持続力によって内から統一されている。またⅢが新しい習慣を身につけても、肉体の構造や機能は必ずしもそれに即応して変わることはない。

⑥ a 他方、肉体は海水とは違ってそれ自体が個物であり、身体と一対一の関係を結ぶとともに、そのものとして固有のリズムを刻んで生きている。心拍とそれに繋がる循環器のリズム、咀嚼からハイセツ<sup>㉗</sup>にいたる消化器のリズム、睡眠と覚醒を繰り返す脳神経のリズムなど、動物にも共通する自然のリズムが肉体を貫いている。そしてこのリズムは疑いもなく、身体の同一性を形成するうえで重大な影響を及ぼすのであって、何よりも決定的な事実はいうまでもなく、肉体の死はそのまま身体の死に直結していることである。

⑦ にもかかわらず、人間が人間であるゆえんはこの現実を超えるところにあり、身体のリズムが肉体のリズムに優越している点にあることは、論を俟たない。肉体はあくまでも文明的身体の指導を受け、新しいリズムをつくるばかりか、その構造さえ一定の範囲で変形することがある。前節で見た例でいえば、幼児が台に縋って立ちあがるうとするのは、骨格や筋肉がそれにふさわしく成長するからだだが、そのままに二足歩行という文明的身体の習慣があって、その影響が幼児を二足で立つ方向に誘導しているのは明らかだろう。

⑧ こうして文明的身体と生理的の肉体とは相互に嵌<sup>㉘</sup>入しあい、それぞれの固有のリズムを共鳴させあっていると

見ることができる。むしろ二つのリズムが複合して新しいリズム単位を形成したとき、それが始めと終わりとを持ち、他人と区別される個人の生涯の誕生だといってもよい。じつはこの生涯にはさらに多様な外界のリズムが重なりあい、複雑多岐な複合体をつくることによって個人の個性が生まれるのである。

⑨ 一般にリズムが他のリズムと共鳴しうること、現に共鳴しあっていることは広く知られている。航行する蒸気船は潮の干満のリズムに乗せられ、上下する波のリズム、前後左右する風のリズムに同調するとともに、船そのもののエンジンのリズムにも揺すられている。船が安全に航行しているとは、これらすべてのリズムが好調に共鳴しあい、一つの内なるリズムを合成しているということであって、それが崩れば波も風も風もにわかにならざる障害となって船を脅かすのである。

⑩ これを身体運動に限って考えても、舞踊家が手と足を別のリズムで動かしながら、全身として一つのリズムを表現するのは珍しいことではない。もっと繊細なのはピアノの指使いであって、両手の指が違うリズムを刻むのはもちろん、片手の人差し指と中指、親指と小指とが組になって、それぞれ異なるリズムを力加ですることも普通だという。もちろんこれはただ異なるリズムを寄せ集めるということではなく、融合され統一されるべきリズムが予想され、あらかじめ芸術家の身体を突き動かしていることが前提だろう。

⑪ この共鳴の関係はさらに広く、身体とその環境のあいだに働いていて、身体を相対的に独立させているとさえいえる。それどころか正確にはむしろこの関係が身体と環境とを区別し、身体を相対的に独立させているとさえいえる。身体はあくまでもリズムの一単位にすぎないのだから、その完結性は強いとはいえず、絶対的な独立性を保持するわけではない。特定の身体と別の身体、自然的、文明的環境とそこに生きる身体との区別は、それぞれに働くリズムの異同によって決定されるのである。

⑫ たとえば同一の生理的肉体の内でも、瞳孔の反射的な拡張などはリズムを持たず、身体行動と共鳴する可能性はありえないから、これは純粹な生理的肉体、身体外部に広がる物理的自然の一部だとしかいいようがない。逆に生理的肉体としては区別される他人の身体でも、ともに同じリズムで踊って完全な共感(empathy)が成立すれば、その瞬間だけは自他の相違はなくなったというべきだろう。一般に、身体の内部と外部を区切るのは固定的な外郭ではなく、リズムの共鳴の強弱という漸層的な変化だと考えられるのである。

⑬ そしてこの共鳴のかたちにも、逆に共鳴の欠如の姿にも **b** の多様性がある。その違いのそれぞれがふたたび身体に帰って刺戟を与える。この段階できわめて大雑把に言えば、この身体への刺戟の現れを常識は知覚と名づけ、認識の与件と呼び慣わしているのだと、理解して大過ないであろう。

(山崎正和『リズムの哲学ノート』より)

【1】 二重傍線部 **A** ~ **E** のカタカナと同じ漢字を書くものを、それぞれ ① ~ ⑤ から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問 1 ~ 5】

1 **A** マギレ

- ① 我はヒフン慷慨の士とならん。
- ② 恐竜の化石に少年はコウフンした。
- ③ 青年は情熱がフンシュツするがままに話し続けた。
- ④ 巨大な岩をフンサイする。
- ⑤ 貴重品をフンシツした。

2 **B** ギョウガ

- ① 彼の発言にギョウテンする。
- ② 寺でシュギョウする。
- ③ 血液がギョウコする。
- ④ 店はエイギョウを再開した。
- ⑤ 山に住むイギョウの化け物。

3 C ハイセツ

- ① 高い関税をテッパイする。
- ② 特定の人をハイセキすべきではない。
- ③ 彼の言動は我が社へのハイシン行為だ。
- ④ 食糧をハイキユウする。
- ⑤ 多くの有能な研究者をハイシユツした大学。

4 D タキ

- ① 学問のキソを培う。
- ② 患者のキオウ症を調べる。
- ③ キチに富む会話。
- ④ 人生のキロに立つ。
- ⑤ オーケストラをシキする。

5 E カナでる

- ① コンピュータをソウサする。
- ② 天皇陛下にソウジョウする。
- ③ 友人にソウダンする。
- ④ ソウメイな頭脳の主。
- ⑤ 本物そっくりの舞台ソウチだ。

【2】 傍線部(a)～(d)の語句の本文中の意味として最も適切なものを、それぞれの選択肢①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問6～9】

6 (a) 論を俟たない

- ① 言うまでもない
- ② 議論の余地がある
- ③ とんでもない
- ④ うたがわしい
- ⑤ 深い意味を持つ

7 (b) 嵌入しあい

- ① 拡大しあい
- ② 侵食しあい
- ③ はまりこみあい
- ④ おとし入れあい
- ⑤ 邪魔しあい

8 (c) 漸層的な

- ① 長い間堆積している
- ② 徐々に進行していく
- ③ やっと明らかにになった
- ④ しばらく残存している
- ⑤ だんだんと積み重なる

9 (d) 認識の与件

- ① 認識して判断するときに必要な論理
- ② 認識の出発点として措定される事実
- ③ 認識する際の前提となる正確な知識
- ④ 認識と切り離すことのできない感情
- ⑤ 認識と相関関係にある心理的要因

【3】 I ～ III には、「肉体」「身体」のいずれかが入ります。その組み合わせとして正しいものを、次の①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問10】

10

① I 身体	II 肉体	III 身体
② I 身体	II 身体	III 肉体
③ I 肉体	II 身体	III 肉体
④ I 肉体	II 身体	III 身体
⑤ I 肉体	II 肉体	III 身体

【4】 a に入る語として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 11 ①なぜなら
- ②したがって
- ③やはり
- ④そこで
- ⑤しかし

【解答欄は問11】

【5】 b には、「さまざま」という意味の四字熟語が入ります。最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問12】

- ①千差万別 ②千秋万古 ③千变万化 ④千軍万馬 ⑤千言万語

【6】 点線部ア「巨視的」の対義語を次の①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問13】

- ①近視的 ②微視的 ③可視的 ④視覚的 ⑤監視的

【7】 点線部イ「成長、成熟、老化の節目を祝ったり慰める行事」とありますが、この行事のようなことを端的に表した語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問14】

- ①加持祈祷 ②年中行事 ③通過儀礼 ④祭祀祭礼 ⑤祭政一致

【8】 波線部A「身体というリズム単位の完結性がとくに高い」とありますが、筆者がそのように考えている理由として最も適切なものを次の①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問15】

- ①多くの文明圏で、時間的な経過による節目節目で祝うことなどによって、身体の変化を区分し、その一つ一つを人の一生の中に位置づけて全体を形成しているから。  
②全ての文明圏において、誕生から死までの間を乳児、幼児、少年、青年、壮年、老年に区分し、各年代をリズムが変化する単位としてとらえるようになっていて、生活習慣の形成に寄与して身体を形づくるようになっていて、  
③世界中の文明において、動物と同じように本能的な運動によって刻まれる肉体の生理的なリズムが、生活習慣の形成に寄与して身体を形づくるようになっていて、  
④多くの文明圏において、生まれたときから二拍子と三拍子という基礎的で普遍性の高いリズムを踏んだ生活を営むことによって、身体のリズムを習得しているから。  
⑤世界中の文明圏において、芸術作品と同様に、人間の肉体も部分部分がまず成長し、そのリズムが変化することによって、身体全体が成長発達しているから。

【9】 波線部B「文明的な身体と生理的な肉体」とありますが、「文明的な身体」と「生理的な肉体」について、筆者が述べていないことを、次の①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問16】

- ①文明的な身体は、衣食住生活などの習慣によって固有のリズム単位として形成され、存在している。  
②生理的な肉体は、文明的な身体が生きていくことの様々な活動のリズムを伝える役割を担っている。  
③文明的な身体のリズムは生理的な肉体のリズムに影響を与え、時には肉体を変形させることもある。  
④生理的な肉体は、心臓、胃等の諸器官や脳神経などが固有なリズムを刻んで生命活動を営んでいる。  
⑤文明的な身体は、生理的な肉体が死滅しても決して消滅することはなく、永遠に存在し続けていく。

【10】 波線部C「他人と区別される個人の生涯の誕生」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問17】

- ①生理的な肉体のリズムは一貫して変わらず維持している一方で、成長するにしたがって文明的な習慣によって自然のリズムが消えて、新しいリズムを持った個体が生まれるということ。  
②生理的な肉体という自然物としてのリズムと文明的な身体が刻む文化・生活としてのリズムとが互いに影響を与え合うことによって、一人ひとりに固有のリズムを持った個体が生まれるということ。  
③骨格や筋肉が成長していくにつれて肉体の生理的なリズムが二拍子から三拍子に変化し、しだいに新たな文明的な身体として再構成されたリズムを持った個体が生まれていくということ。  
④文明によって制約された身体のリズムの変化がまず起こって、それに指導されるように生理的な肉体が変形することによって、誕生した時とは異なる固有の人格が生まれるということ。  
⑤一人の人間が誕生してから成人になるまでの間に、生理的な肉体が個人個人の運動によって大きく変形され、人工的で個性的な肉体を持った存在として、新たに生まれ変わるということ。

【11】 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。 【解答欄は問18】

- ① 人間という存在は、誕生と死という自然的、物理的な肉体のリズムによって、完全に統御された身体を構成している。
- ② 全ての人の身体は、それを取りまく社会的環境によって大きく左右されており、自然環境と区別できなくなっている。
- ③ 生理的な肉体は、誕生から死まで不変であるのに対して、文明的な身体は生活や文化によって常に変化し続けている。
- ④ 文明的な身体は生理的な肉体から独立したリズムによって形成されていき、最終的には肉体の死からも独立している。
- ⑤ 芸術家は、自己の部分部分の肉体がそれぞれ異なるリズムを刻みながらも、全身として統一的なリズムを表現できる。

18

【12】 本文の展開について述べたものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問19】

- ① ①でリズムと身体に関する全体の主張を述べ、②から⑧でその根拠について具体例を挙げて論証し、⑨以下は反論を想定した再反論である。
- ② ②と③は①で主張していることの具体例、また⑥は⑤の具体例などのように、抽象的な言説の後にはかならずその具体例による説明がある。
- ③ ⑤と⑥で身体と肉体との関係を論じた後、⑦で「身体の優位性」へと展開し、⑧で両者の相互作用による「個人の誕生」へと論を進めている。
- ④ ①～⑧の内容をうけて、⑨～⑬では「共鳴」という視点からの考察を付加し、「身体」から自然全体のリズムの在り方に論を発展させている。
- ⑤ ⑬の段落は、冒頭の段落で述べている筆者の主張を、言い換えをしながら繰り返して論じ、より一層主張を明確にして全体の結論としている。

19

二次の短歌とその鑑賞文を読み、後の問【1】～【11】に答えなさい。なお、作問の都合上、原典にある、歌集名及び一部の作者名は省略しています。

「神は細部に宿る」という言葉があります。建築家のミース・ファン・デル・ローエが、建築を語る際によく使った言葉です。建築に限らず、優れていると感じられるものは、細部を大切に作られているものが多いのではないのでしょうか。短歌にも同じことが言えると思います。細部をよく見詰め、一首の中に取り入れた作品について<sup>④</sup>ケンキウウしたいと思います。

いつの日か思ひ出ださむアパートの把手の裏なるわづかのへこみ

内藤 明

おそらく一人暮らしの部屋のドアのノブでしょう。毎日、外出するときはそのドアノブに必ずふれて、出掛けていったのです。ドアノブは、世界と自分をつなぐ<sup>③</sup>原初的なツールだと捉えることもできるでしょう。ある日、そのノブがわずかにへこんでいることに気付きます。最初からへこんでいたのか、自分で作ってしまったものなのかは分かりませんが、「わづかのへこみ」の感触とともに、それが自分のノブであると実感しながら日々生活していたことでしょう。

外から帰ってきたとき、うかれた気分のこともあるれば、ひどく落ち込んでいたときもあると思います。その日その日の、それぞれの気持ちでドアノブを回す一瞬も、蓄積される思い出の一つです。それを確かめつつ、このノブを使わなくなったのちに思い出すのかもしれない、と感慨をこめています。引越して出て行くその日に詠んだのかもしれない。いずれにしても、ドアノブのへこみという、他者にとっては **A** ことでも、自分にとっては日々の記憶を呼び覚ます、 **B** 小さな事実として丁寧に描き込むことで、作者が大切にしている気持ちを伝えることができたのです。

雪の上にいたりて雪は姿消す天なるものはためらはぬなり

佐藤通雅

地上に積もった雪の上に、空から降ってくる雪がさらに積もってゆきます。上の句は、文章の中では「雪が積もる」と一言で書き終えてしまえる情景です。誰もが見たことがあり、すでに表現が定まっている降雪という事象も、この歌のように詩的な視線で細やかに観察することで、雪の一粒ずつの存在について想いを<sup>⑤</sup>ハせることができるようになるのです。雪の一粒が、他の雪の中に同化して消えていく、というささやかな自然現象から、「天なるもの」、つまり、自然の圧倒的で大らかな存在を再認識することができ、感覚が豊かに広がっていきます。

白きうさぎ雪の山より出でて来て殺されたれば眼を開き居り<sup>c</sup>

斎藤 史

雪山に隠れていた白いうさぎが、姿を現したとたんに猟師に殺されてしまったという場面を詠んでいます。事実だけを<sup>⑥</sup>タンタンと述べているように見えて、非常に心を動かされます。この歌の場合、結句の「眼を開き居り」という具体的な描写が大事な役割を果たしています。「眼を見開く」という表現には、驚く、という意味が含まれています。無邪気に雪山を跳ねていたうさぎは、突然殺されて、驚きのあまり眼を開いたまま死んでいったのでしょうか。この歌は、様々な<sup>⑦</sup>不条理の憂き目に合った人々の心情を代弁しているのです。

白い雪山から出てきた白いうさぎ、という白ばかりの世界に見開いた二つの瞳は、映像的にもインパクトがあります。悲しみと怒りで、充血していたのかもしれない。

投稿歌を読んでいて、惜しいなあ、と思うことがよくあります。どんな歌に対してそう思うのかというと、独自のひらめきや発見があり、表現に工夫が見られるのに、歌の後半で内容をまとめすぎている場合です。せっかくのおもしろい発想やエピソードも、「○○は○○である」と論文のように説明がついてしまうと、短歌としての広がり欠けてしまいます。

短歌は、事実を正確に伝えるためだけのものではなく、事実の背後にあるいわく言い難い感情や感覚を、他者の心になげかける詩の形だと思います。優れた作品は、意味内容だけではない深い余韻が読後に残り、折節に思ひ起こすことができます。

では、余韻の残る歌とはどのようなものなのか、具体的に読んでいきたいと思えます。

### 赤茄子の腐れてゐるところより幾程もなき歩みなりけり

斎藤茂吉

「赤茄子」とは、トマトのことです。畑の中でトマトが熟れすぎて腐っていた、その場所から少し歩いただけである、という意味です。まとめてしまうと他愛のない内容ともいえるのですが、奇妙な後味が残ります。読者は、「赤茄子」が腐っている映像を思い浮かべるとともに、「幾程もなき歩み」をわざわざ短歌にしたことの意義を考えずにはいられなくなります。

もしも赤茄子が腐っていなければ、畑にトマトが実っている普通の景色としての印象しか受けられないでしょう。腐っている赤茄子、という、決して美しくはない情景が与えるインパクトから、下の句の状況が表すものを能動的に探ろうとするのです。

この歌は、世の中にあるあらゆる腐敗から自分がそれほど隔たっているわけではなく、自分の中にも醜いものがあることを感じている、という自分自身へのほのかな **E** を描いたのではないのでしょうか。はっきりとした説明がないため、何か具体的なエピソードが隠されている可能性もあり、いろいろな読みの広がる歌です。

この下の句は、上の句と関連づけて、もっと分かりやすくすることも可能だったかと思えます。例えば、「赤茄子の腐れてゐるところより吾追いかけてくる嫌な蠅」とすると、赤茄子にたかっていた蠅が自分を追いかけてきた、という嫌な感じが伝わり、作者の愉快ではない心持ちがよく伝わります。しかし、そうですか嫌だったのですね、という一つの共感からさらに踏み込んで何かを読み取るうとする意欲はわきません。歌が説明的になりすぎるのです。

この歌は、腐った赤茄子のあった場所から数歩歩いた、という情報以外描かず、自分の感想は挟みこんでいません。提示したものから、読者が自ずと感想を浮かび上がらせることができるよう、あえて情報に空白を残しているのです。

### めん雞ら砂あび居たれひつそりと剃刀研人は過ぎ行きにけり

斎藤茂吉

この歌も、砂を浴びるめん雞のいる静かな村を剃刀研人が行き過ぎる、というだけのエピソードです。作者の想いは直接には書かれていないのですが、ひりひりするような緊張感があります。めん雞には、食用のために首を切られて殺されるイメージがあり、行き過ぎるだけの剃刀研人は、めん雞に直接触れたりなどしないにもかかわらず、不吉なイメージをカシキさせるのです。この歌も、下の句を「剃刀研人過ぎるは不吉」などと伝えたい感覚を言葉でまとめてしまうと台無しになります。伝えたいことは言葉では描かず、背後から感じ取ってもらうことで、歌に余韻を持たせることができるのです。

印鑑は文明堂の箱の中 母の慣を受け継ぎ暮らす

藤島秀憲

印鑑をいつも文明堂の箱の中に入れて使っていたのは、母親の習慣でした。生活の細々としたことを賄<sup>(五)</sup>つてきた母が他界したのちも、家族はその習慣を受け継いで生活は続きます。日常の何気ないできごとを繊細にとらえ、しみじみとした感慨が伝わります。結句に感情を示す言葉などは置かず、「受け継ぎ暮らす」とさりげなく描くことで、滋味<sup>(六)</sup>が生まれているのです。

何びとにもあらざるわれは昼過ぎて蟬啼く声に濡れとおりおり

阿木津 英

夏の真昼にひたすら啼きつづける蟬の声を、身体の内側まで染みとおるように茫然と浴び続けている、というシンプルな構造の歌です。「何びとにもあらぬ」状態であるゆえの G と孤独が、全身を貫いているようです。真夏の思考停止状態の痺れるような感覚が、「濡れとおりおり」という動詞の H 音の印象的な響きとともに消え残ります。

工場見学を題材にした連作の最後に置かれた一首。何の工場なのかは分かりませんが、川沿いに立っているでしょう。工場から離れ、対岸に立って煙突を眺めます。そこから吐き出される煙は、何が燃やされてできたのかは分かりません。工場から断続的に吐き出される煙は、ただただ空に溶けてゆきます。遠くのできごとのように見えるけれど、空は自分たちの生きている世界とつながっています。傍観者として、生まれては消えていくものを眺めるだけの自分への疑問を、投げかけてもいるのでしょう。主張しない描写の外側に、しずかな意志が感じられます。

(東直子『短歌の不思議』より)

【1】 二重傍線部 A ～ D のカタカナの漢字表記として正しいものを、①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問 20 ～ 23】

20 A ゲンキユウ

- ① 現窮
- ② 源究
- ③ 原級
- ④ 減給
- ⑤ 言及

21 B ハせる

- ① 馳
- ② 派
- ③ 波
- ④ 羽
- ⑤ 破

22 C タンタン

- ① 単々
- ② 淡々
- ③ 端々
- ④ 短々
- ⑤ 嘆々

23 D カンキ

- ① 換気
- ② 歓喜
- ③ 勘気
- ④ 喚起
- ⑤ 官記



【2】 二重傍線部(ア)～(オ)の語句の意味として最も適切なものを、それぞれの選択肢①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問24～28】

24 (ア) 原初的な

- ① 宇宙誕生の秘密を表している
- ② 全ての物質の基となっている
- ③ 人間にもともと具わっている
- ④ 進化していない最もはじめの
- ⑤ なにことにも通じる原理的な

25 (イ) 不条理の憂き目

- ① 道理の立たないつらい経験
- ② 筋道の通らない無理な要求
- ③ 理性では理解できない事態
- ④ 常人では耐えられない状況
- ⑤ 理屈の通らない情実の世界

26 (ウ) いわく言い難い

- ① 言葉では理解できないほど抽象的な
- ② 簡単には表現できないほど複雑な
- ③ 簡単には言えないほど不可思議な
- ④ 言語で表しえないほど非現実的な
- ⑤ 言葉にするとあっけないほど単純な

27 (エ) 賄ってきた

- ① 養いつづけてきた
- ② 工夫を重ねてきた
- ③ 食事を作ってきた
- ④ 取り計らってきた
- ⑤ 間に合わせてきた

28 (オ) 滋味

- ① さりげない思いやり
- ② にじみ出る人情味
- ③ ひそやかな慕情
- ④ 懐かしい感覚
- ⑤ 深い味わい

【3】 空欄A・Bに入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問29】

- |    |     |         |    |   |         |    |     |          |    |   |       |
|----|-----|---------|----|---|---------|----|-----|----------|----|---|-------|
| 29 | ① A | どうでもよい  | —— | B | ささいな    | —— | ② A | 目も当てられない | —— | B | 目の覚める |
|    | ③ A | 取るに足らない | —— | B | かけがえのない | —— | ④ A | 興が醒める    | —— | B | 興に乗る  |
|    | ⑤ A | みすばらしい  | —— | B | ぜいたくな   | —— |     |          | —— |   |       |

【4】波線部C「眼を開き居り」という句が表現していることについて、五人の高校生が自分の考えを述べています。

①～⑤の中で、鑑賞文の内容に最も近いものを選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問30】

①白いうさぎが眼を見開いていたのは、きっと目の前の食べ物に気を取られていたからだと思う。だから、作者は、どんなときでも決して油断をしないといけないという戒めをこの歌に込めたのではないかと僕は思う。

②そうかしら。雪の山から出てきたうさぎは、きっと用心深くあたりを見回したのだと思う。油断していたわけではなかったけれど、ベテラン猟師の狡猾さにしてやられてしまったという情景よね。眼を開いているうさぎというのは、とても愛くるしい感じがする。だから作者はかわいいうさぎが一瞬で殺されてしまったことをかわいそうに思っているように私は感じるわ。

③愛くるしい表情というのはどうかな。ぼくは、眼を見開いているというのは、カッと敵を見据えた表情だと思う。眼光鋭く、決してかわいい表情には見えないな。おそらく、作者はうさぎの命を強権的に奪った猟師への怨みと憎しみを、うさぎになりかわって詠んだのではないだろうか。

④作者は必ずしも猟師を敵としては描いていないと思うわ。あくまでも焦点は殺されたうさぎにあると思うの。白いうさぎは、雪山から出てくるときには、猟師に殺されるとは思ってもみなかったのでしょう。「眼を開いている」という描写からは、「どうして自分が殺されてしまうのだろう」と、納得できないままに死んでいったうさぎの思いがひしひしと伝わってくる、私は感じるわ。

⑤みんないろいろうさぎの身になって考えているけれど、そもそも「眼を開いて」殺されてしまった、ということに特別な意味を読み取らなくてもよいのではないかなあ。弱肉強食の自然界の摂理を素直に描いている歌として捉えればいいのではないかなあ。

【5】波線部D「奇妙な後味が残ります」とありますが、その理由として最も適切なものを選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問31】

①畑の中でトマトが腐っているという情景は、決して詩的でも、美しい景色でもない。でもそこから数歩歩いただけだ、ということをあえて短歌として詠んだということは、作者がそこに何らかの「詠むべきこと」を見出したからだろうと、読者にさまざまな想像をかきたてさせるから。

②トマトが畑の中で熟れすぎて腐っていて、そのようなところから少し離れた場所にいるという、普通なら歌にはなりえない景色を詠んだところに、作者のゆがんだ美意識を感じさせられ、そのような作者に違和感を覚えるから。

③トマトが腐っている畑から数歩離れた、という何気ない作者の行為に、都会で医師をしている作者の、農業に対する無理解と高踏的な態度を感じさせられ、作者のそのような態度に反感を感じさせられるから。

④畑の中でトマトが熟れすぎて腐っているという情景自体が詩的でも、美しくもないにもかかわらず、そこから数歩離れたところに歩んだということをやわざ短歌にして詠んだということに、作者の奇をてらった下心が透けて見えるから。

⑤トマトが畑の中で腐ってしまっているという情景は、それほど特別な景色ではないが、その後に「幾程もなき歩み」と詠むことによって、トマトが腐っている情景の持つ特別な意味を考えさせるように作者が技巧を駆使しているから。

【6】空欄Eに入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問32】

32 ①違和感

②嫌悪感

③陶醉感

④罪悪感

⑤圧迫感

【7】 波線部F「ひりひりするような緊張感」を筆者が感じる理由として、最も適切なものを次の①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問33】

- ① 剃刀研人ということから、自分が鋭利な剃刀を当てられているかのような錯覚に陥るから。  
② 剃刀研人が通り過ぎるのは、めん雞の首を切るためだという論理関係を表現しているから。  
③ 剃刀を研ぐということから、その剃刀で人を殺すのではないかというイメージを誘うから。  
④ 剃刀研人という言葉は、細心の注意を払う、緊張感に満ちた仕事という想像を広げるから。  
⑤ 剃刀研人がめん雞の首を切ってしまうのではないかということ、読者に連想させるから。

【8】 空欄Gに入る語として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問34】

- ① 卑屈 ② 羞恥 ③ 自嘲 ④ 自由 ⑤ 呪縛

【9】 空欄Hに入るアルファベット一文字として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問35】

- ① O ② E ③ U ④ N ⑤ T

【10】 空欄Iに入る歌として最も適切なものを、その後の鑑賞文の内容から判断して次の①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問36】

- ① 吾が町工場を楽しくせむと歌いつつころがしころがし行くドラム罐  
② 焼けあとの運河のほとり歩むときいくばくの理想われを虐む  
③ 海ホテルとおく他界のごとく昏れけぶりたつ けぶりてゆかな一生ひとよ  
④ 圧力を除かれし液が縹渺と還元しつつある白けむり  
⑤ 対岸にわれは見てをり煙突の吐きたるものの溶けてゆく空

【11】 点線部Jの歌人「斎藤茂吉」について述べた次の文章中の空欄A～Dにあてはまる人名、作品名、雑誌名として正しいものを、それぞれの選択肢①～⑤の中から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問37～40】

斎藤茂吉は、明治四十二年に師の伊藤左千夫が創刊した歌誌『A』に参加し、その才能を開花させていく。当時の歌壇は、一時隆盛を極めた、与謝野鉄幹・晶子（歌集『B』の作者）らの新詩社からの雑誌が終刊となり、一方で『スバル』が創刊され、新しい歌が展開してくる時期であった。『スバル』に参加したCは、大正二年に第一歌集『桐の花』を刊行し、耽美的な歌風の歌を詠んだ。その同じ年に斎藤茂吉の第一歌集『D』も刊行されている。この歌集には、有名な「死にたまふ母」の連作をはじめ茂吉の「写生」の説をいかななく發揮している歌が収められている。

- 37 A ① 明星  
② アララギ  
③ 心の花  
④ 多磨  
⑤ コスモス
- 38 B ① 竹の里歌  
② まひる野  
③ 邪宗門  
④ あらたま  
⑤ みだれ髪

- 39 C ① 北原白秋  
② 石川啄木  
③ 土岐善麿  
④ 前田夕暮  
⑤ 山川登美子
- 40 D ① 恋衣  
② 切火  
③ 別離  
④ 赤光  
⑤ 黒檜